

「男性の子育て」支援プログラムの実践的研究¹

野津山 希・佐藤勢子・中浜千明²・青野篤子

福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：男性の子育て，父親，パパ友

はじめに

少子高齢社会の進行に伴い、さまざまな少子化対策が講じられている。2004年には「子ども・子育て応援プラン」、2005年からは「次世代育成支援対策法」に基づき、父親の育児休業の推進対策が打ち出された。しかし、男性の育児参加はほとんど進んでいないのが実態である。2009年度における日本の男性の育児休業取得率は過去最高となったもののまだ1.72%に過ぎない（朝日新聞社，2010）。2010年10月広島県の湯崎知事が育児休業を取ることを宣言（イクメン宣言）したが、全国の知事では初めてと言われている。もっとも、育児休業・育児休暇の取得が育児参加の眼目ではない。重要なのは、男性が育児に「参加する」という姿勢で臨むのではなく、子育てを平等に担当するイコール・パートナーになることである。また、女性も男性も仕事と家庭を両立できるようなワーク・ライフ・バランスを進めていく必要がある。

青野（2009）は、従来の子育て支援プログラムの多くが母親を対象としており（意図せずとも、結果的に参加者の大半が母親になっている例が多い）、母親育児を再生産することになりかねないとし、男性の子育てを進めるための施策やプログラムが必要であると述べている。すなわち、男性を父親へと「成長」させるために、男性を社会政策の対象に位置付ける必要がある（中村，2008）。そのような状況でとくに男性の子育て参加に焦点を当てた施策としては、2007年度から導入された「子育てパパ応援事業」がある。これは、男性の育児参加を推進するために、育児中の父親向けサークルや講座の開催を支援するものである。父親に子育ての喜びや大切さを知ってもらい、母親の負担の軽減を図るため、地域が一体となった取り組みを進めるのが目的とされ、全国の市町村で様々な取り組みが行われている。そういった行政の取り組みと前後して、民間やNPOによるさまざまな活動が展開されるようになった。とくに後者は、父親の父親による父親のための活動として注目される。

その代表と言えるのが、ファザーリング・ジャパンの活動である。この団体は2006年に結成され、「父親であることを楽しもう」をスローガンにして、NPO法人（ソーシャル・ビジネス・プロジェクト）として活動を開始し、いくつかの支部も生まれている。この団体は、セミナー事業（父親支援のための各種セミナー、講演会の実施）、検定試験事業（父親向け検定試験の実施）、コンサルタント事業（子育てや父子コミュニケーションをテーマにした商品・サービスの開発、およびマーケティング支援）、保育所事業（父親たちによる自主管理型保育園の運営）、物販事業（父親の子育てグッズの販売）、音楽配信事業（子育てに関わる音楽や動画のネット配信）、調査・研究事業（父親支援のための各種アンケート調査の実施と研究）、メディア事業（父親支援情報満載のポータルサイトの運営、フリーマガジンの発行）など、実にさまざまな取り組みを行っている。また行政への働きかけや政策の提言も積極的に行っている。

こういった事業を支えるためには父親同士のつながり、つまりネットワークが必要であり、「パパ友」（ファザ

¹ 本研究は、平成19～23年度私立大学社会連携研究推進事業（文部科学省／私立大学学術高度化推進事業）プロジェクト3「こころづくり 地域の心の健康作りに関する実践的研究」の一部である「男女共同参画の視点からの子育て支援に関する実践的研究」の一環として行われた。

² 福山大学社会連携推進事業研究支援スタッフ

ーリング・ジャパン代表の安藤氏の命名とされる)づくりが中心をなしていると考えられる。安藤(2010)は、自分だけが満足するのではなく、一人一人が自ら動き、その活動を可視化すること。それによって一人でも多くのまだスイッチのついていない父親を揺さぶること、家族や次世代のために社会を変えたいと願う父親たちの、緩やかだが結束の固いネットワークこそが社会変革の原動力となると述べている。実際に子育てサークルに参加している父親は、子育てサークルに参加しているうちに、育児が父親同士のコミュニケーションの場となり、自分の育児、家事行動を見直す時間になっているとの報告もある(田中, 2009)。

父親の子育て支援には、男女共同参画の視点からの意識啓発や学習という側面も含んでいる。吉岡(2009)は、父親の学びに関する実践論を今後明確にしていかなければいけないとしている。そして、父親支援のための学習には、学習者である父親と学習を組織し推進する親が共に学び合う形での話し合い、父親、母親のどちらか一方に偏らない構成メンバー、多様な背景をもった子育て経験者の世代間経験交流、継続的な子育て学習を積み上げた学習組織者の存在、が必要だと指摘している。

男性の子育てを定着させるためには、次の世代の意識啓発や準備教育がきわめて重要である。日本では兄弟・姉妹数の平均が2人を切っており、子どもたちは下の子の世話をする機会がないまま成長する場合が多い。また、核家族化、地域社会の崩壊が続く中で家庭と地域の教育力は低下し、祖父母世代との交流や育児文化の伝承が困難になっている。そこで、近年、女性と男性の区別なく、親になるにふさわしいパーソナリティとして養護性や親準備性という概念が提唱されている(佐々木, 2007)。そして、親準備性の育成のためには、幼い子どもとの接触体験を意図的に提供する必要がある。伊志嶺(2005)は、カナダのプログラムを参考にして、小中高生や大学生を対象とした赤ちゃんとのふれあいプログラムを実施し、その効果を検証している。広島県では、2010年度の事業として「若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究補助金事業」を推進中であり、福山大学を含め県下13の大学・短大が特色のあるプログラムを考案しその効果を検討中である。

福山大学では社会連携研究推進事業の一環として、子育てステーションを拠点に、「男女共同の子育て」支援を行っている。2008年12月には、広島県、ひろしまこども夢財団との共催で、「男性のための子育て講座——みんなで一緒に子育てしよう——」を開催した。この企画では、育児休業を取得した父親の体験談、子育てを仕事にしている男性保育士の子育て観、小児看護学の立場から母性と父性の研究をしている大学教員の話をもとに参加者で男性の子育てについて話し合いを行い、その後妊娠体験・抱っこ体験、コミュニケーション・スキルの体験学習を行った。2009年3月には、福山市にあるつくし保育園との共催、ひろしまこども夢財団の後援により、「男女共同の子育て講座——互いに理解と協力を——」を開催し、男女が日ごろの育児や、相互に期待していることなどを話し合い、葛藤解決に有効なコミュニケーション・スキルについて体験学習を行った。

これらのイベントを通して、男性の子育てがそれほど進んでいない実状、育児や家事のスキルを習得する機会が少ないこと、父親同士が情報交換し友だちづきあいができる機会と場所が求められていることが明らかとなった。そこで、上記のようなプログラムを日常的に市民に提供するために、子育てステーションは2009年度より土曜日を利用した新たな連続プログラムを実施することにした。その一つが「サタデーパパ」である。このプログラムは、①パパ友づくり、②パパと子どもの関係づくり、③次世代の親準備教育を目的とし、ジェンダーの視点から、「遊び」のみならず「世話」や母親的役割を支援することを心がけた。本報告は、サタデーパパの活動実績をふまえ、父親の子育て支援の課題と展望を明らかにしようとするものである。

サタデーパパの活動内容

目的

子育て中の父親、あるいは将来父親になる可能性のある男子大学生を対象として、パパ友づくりと世代間コミュニケーションが可能となるような、男女共同参画や育児に関する学習と情報交換や、親子が参加できる物づく

りやエクササイズなどの活動を定期的に行うことを目的とした。なお、当初は父親の学習を活動の中心にする予定であったが、父親たちは単独でなく子ども連れのほうが参加しやすく、プログラムを通して父親たちがペアレンティングの実践ができ、またその間母親たちを育児から開放してあげられるというメリットも考えられたので、親子ペアの参加を基本とすることにした。

実施方法

募集方法 福山市内の保育所、幼稚園など 183 ヶ所にサタデーパパの案内を送付。また、ひろしまこども夢財団による「kids 情報送信サービス」より毎回のイベント内容の配信を行った。

対象者 主に、子育て中の父親と子ども、男子大学生。希望があれば母親や家族、女子学生も参加可とした。

実施場所 福山大学社会連携研究推進センター2 階育児支援室。

実施日と回数 2009年6月～2010年10月まで毎月第1土曜日に実施。計15回。

プログラムと参加者数

イベント内容および、イベント参加人数は表1の通りである。なお、毎回のプログラムの後半は、参加者同士でのフリートークの時間を設定した。参加者の年齢は、父親、母親は30代～40代が多く、子どもは11ヶ月～6歳までの乳幼児の参加が多かった。職種は、会社員、販売・サービス、自営業など様々であった。参加形態は、親子(父親と子ども、母親と子ども)での参加が多く、家族での参加も見られた。また、父親1名は自発的な参加であったが、その他の父親は妻から促されての参加であった。

表1 各回の内容と参加者数

イベント名	父親	母親	子ども	学生	その他
第1回 6月6日：虫歯予防デー	2	1	2	5	0
第2回 7月4日：パパ子で楽しむ気功教室	3	1	3	6	0
第3回 8月1日：地球にやさしい虫よけスプレーづくり	3	4	4	5	1
第4回 9月5日：お月見パーティー	3	1	4	4	0
第5回 10月3日：親子のコミュニケーション講座	2	1	3	3	0
第6回 11月7日：落ち葉を使った秋の遊び	2	1	2	4	0
第7回 12月5日：パンケーキでクリスマスパーティー	2	3	5	7	0
第8回 2月6日：妻への逆チョコ作り	2	2	3	3	0
第9回 3月6日：こむぎねんどづくり	0	2	2	3	0
第10回 4月3日：ころふわホットケーキでお花見	2	4	5	3	0
第11回 6月5日：オリジナルビニール傘づくり	1	2	3	14	0
第12回 7月3日：手作りダンボールハウス	3	4	8	8	0
第13回 8月7日：風鈴づくり	0	1	1	7	0
第14回 9月4日：学生による読み聞かせ・お豆腐団子づくり	5	4	10	7	0
第15回 10月2日：男性の子育てシンポジウム	22	16	4	16	9
合計	52	47	59	95	10

各回の内容

第1回 虫歯予防デー 父親と子ども(女兒)1組、父親と母親と子ども(男児)1組、学生5名、スタッフ4名が参加した。大学生による紙芝居や、子どもの歯ブラシの選び方、仕上げ磨きの実演など、虫歯予防にちなんだ活動を行い、父親が歯磨きなどの母親的役割を体験した。参加者からは、子どもと触れ合う良い機会になる、

それまでしていなかった子どもの歯磨きをするようになったとの意見が聞かれた。また、参加した父親からは、パパ友で何かやりたいという意見も出された。

第2回 パパ子の気功教室 父親と子ども（男児2名）2組、父親と母親と子ども（男児）1組、学生6名、スタッフ3名が参加した。親子で簡単に出来る気功を行い、リラックスしながら親子の触れ合いを楽しんだ。

第3回 地球にやさしい虫よけスプレーづくり 母親と子ども（女児）1組、父親と母親と子ども（3組とも男児）3組、祖母1名、学生5名、スタッフ4名が参加した。アロマオイルを使った自然素材の虫除けスプレーを作る事により、親子でエコについて考える機会とした。また、スタッフによるヨガ教室も同時に開催し、講座終了後には、ファザーリングジャパンの活動、パパ検定などの紹介を行った。参加者からは、虫除けスプレーは自分でも作れそうなので今度は自分でも作ってみようと思ったという意見や、ヨガは日常から離れてリラックスできたという意見があげられた。また、ファザーリングジャパンのことが知れて視野が広がったという意見も聞かれた。

第4回 お月見パーティー 父親と子ども（男児3名）3組、母親と子ども（女児）1組、学生4名、スタッフ3名が参加した。お団子づくりを通して父親に母親的役割を体験してもらおうと同時に、子どもとのコミュニケーションを図った。また、講座終了後には、初めて参加した父親が多かったため、自己紹介やファザーリングジャパンの紹介、また、ファザーリングジャパンによるパパ力検定も行った。参加者からは、母親のサークルは沢山あるが、父親のサークルはないので参加出来て良かったという意見が出された。

第5回 親子のコミュニケーション講座 父親と子ども（男児、女児）2組、母親と子ども（男児）1組、学生3名、スタッフ2名が参加した。各年齢に応じた遊びや関わり方など、子どもの発達を学んだ。また、タオルなど身近なものを使った遊びの実演なども行った。参加者からは、日頃の自分の行動を振り返る事ができて良かったという意見が出された。

第6回 落ち葉を使った秋の遊び 父親と子ども（女児）1組、父親と母親と子ども（男児）1組、学生4名、スタッフ3名が参加した。秋の自然に触れながら、自然について考えたり、製作を通じて親子のコミュニケーションを楽しんだ。

第7回 パンケーキでクリスマス・パーティー 父親と子ども（女児）1組、母親と子ども（女児2名、男子1名）2組、父親と母親と子ども（男児）1組、学生7名、スタッフ4名が参加した。男子大学生が主体となり、参加した父親らと共にクリスマスケーキ作りを行った。クリスマスケーキ作りを通して母親的役割を体験してもらおうと同時に、子どもとのコミュニケーションを図った。また、講座終了後には、大学院生による父親の子育てに関する研究発表を行い、参加した父親と意見交換を行った。

第8回 妻への逆チョコ 父親と子ども（女児）1組、母親と子ども（男児）1組、父親と母親と子ども（男児）1組、学生3名、スタッフ2名が参加した。父親が子どもと一緒にバレンタインのチョコを作り、妻や子どもとのコミュニケーションを図った。参加者からは、子どもに包丁をはじめて持たせたのでとても緊張した、簡単に作れたので家でも作ってみようと思ったなどの意見が出された。

第9回 こむぎねんどづくり 母親と子ども（男児2名）2組、学生3名、スタッフ2名が参加した。子どもにも安心して使える小麦ねんどを作成しながら、親子で素材の感覚やねんど遊びを楽しんだ。

第10回 ころふわホットケーキでお花見 父親と子ども（女児）1組、母親と子ども3組、父親と母親と子ども（男児）1組、学生3名、スタッフ3名が参加した。父親がホットケーキ作りを通して母親の役割を体験すると同時に、子どもや参加者同士でコミュニケーションを図った。また、外に出て春の季節を子どもと一緒に楽しんだ。参加した父親からは、いつも母親にべったりだと思っていたが、積極的に一人で遊びに行っており、子どもの違う面を見ることができたなどの意見が出された。

第11回 オリジナルビニール傘づくり 父親と子ども（女児）1組、母親と子ども（男児2名）2組、学生14名、スタッフ3名が参加した。傘づくりを通して、季節を感じたり、傘に落書きを一緒に行う事により親子

のコミュニケーションを図った。また、講座修了後には、学生から父親へのインタビューも行った。

第12回 手作りダンボールハウス 父親と子ども（女兒2名）1組、母親と子ども（男児2名）2組、父親と母親と子ども（女兒2名、男児2名）2組、学生8名、スタッフ3名が参加した。親子で作製する楽しさを体験した。また、講座終了後には10月に行われる「男性の子育てシンポジウム」の案内や、参加者同士やスタッフを交えての話し合いなどを行った。参加した母親からは、ここに来れば少しの間でも子どもを見てもらえるので助かるという意見が出された。

第13回 風鈴づくり 母親と子ども（男児）1組、学生7名、スタッフ2名が参加した。身の回りの物を再利用する事により、親子でエコについて考えた。

第14回 学生による読み聞かせ・お豆腐団子づくり 父親と子ども（女兒2名、男児3名）4組、母親と子ども（男児3名）3組、父親と母親と子ども（男児2名）1組、学生7名、スタッフ3名が参加した。学生が主体となり子どもに絵本の読み聞かせを行うことで、学生に子どもとの接触を促した。また、参加した父親には、お団子づくりを通して母親的役割を体験してもらおうと同時に子どもとのコミュニケーションを図った。講座終了後には、父親とスタッフとで男性の育児についての話し合いを行った。

第15回 男性の子育てシンポジウム 父親22名、母親16名、子ども4名（女兒1名、男児3名）、学生16名、スタッフ4名、その他9名の参加があった。ファザーリングジャパンの代表である安藤哲也さんの基調講演と本プログラムの常連である父親2名の話題提供の後、参加者で男性の子育てについて話し合いを行った。参加した父親からは、自分の行動を思い起こし、妻、子どもの為に何が出来るかを考えていきたい、自分も家事をしようと思った、などの意識の変化を表す感想や、ファザーリングスクールの活動内容に興味を持ったので詳しく知りたいなど意見が出された。その他、育児休暇の取れる社会を目指そう、意識改革をしなければと感じたなどの意見や、学生からは、将来の自分の参考にした、い、「サタデーパパ」に参加したい、将来共働きで子育てをしたいなどの意見が出された。

プログラム全体に関する感想

まず企画内容について、日頃父親が子どもと何かをする機会は少ないので様々な活動を企画して欲しい、親子で楽しめる企画を考えて欲しいなど、子どもとのコミュニケーションが図れるような内容についての要望がいくつか挙げられた。次に、開催日時について、土曜日に仕事がある場合もあるので他の曜日にも開催して欲しい、時間帯をずらして1日2回開催して欲しいなどの要望が挙げられた。また、広報について、子育て世代が集まる情報サイト等を通じて宣伝をすれば利用者が増えると思うなどの意見が出された。その他にも、駐車場の利用や、対象者を具体的に絞った方が参加しやすいなどの要望が挙げられた。

考察

本報告では、①パパ友づくり、②パパと子どもの関係づくり、③次世代の親準備教育を目的とした独自のプログラムであるサタデーパパの活動実績をふまえて、父親の子育て支援の課題と展望を明らかにしようとした。

まず、パパ友づくりについては、父親の参加人数の少なさや、中でも自発的に参加した父親が少なかったこと、参加メンバーが毎回流動的であったことなどから、広がりがなく、十分に定着したとは言い難かった。また、参加者募集の際に、当初は父親限定と考えていたが、父親以外の参加についての問い合わせが多くあったため、子育てに関わる人であれば誰でも参加可能にした。このことにより、母親や子どもと一緒に参加する父親が多く、家族単位で活動を行うことで、父親同士が交流をもつ機会を逆に少なくした可能性がある。しかし、参加した父親の中には、「パパ友で何かやりたい」、「もっと仲間を増やしたい」といったパパ友づくりに積極的な意見もいくつか挙げられた。また、継続的に本企画に参加した父親からは、「企画内でのパパ友づくりは難しかったが、毎回子どもと参加することで、地域や会社で子育てについて話をすることが増え、自分の地域でのパパ友

ができた」といったような意見も挙げられ、少数の父親ではあるが、パパ友の重要さが伝えられたのではないかとと思われる。

現在まで、父親のソーシャルサポート研究や父親特有の育児ストレス研究は少ないが(宮本・藤崎, 2008)、時代の変化に合わせて父親にも育児における役割が多く求められるようになり、父親も母親と同様の育児の悩みやストレスを抱えていると思われる。安藤(2010)は、これからの父親育児で重要なのは、決して「自家完結」せず、地域の中で、「パパ友」をつくり、そのゆるやかなネットワークの中で子育てをしていくことだと述べており、父親が育児に関わるためには、生活力と父親同士の繋がりがあることが重要であると考えられる(田中・橋本, 2007)。このように、父親の育児参加にとっては、パパ友のつながりは重要視されており、今後は開催日時の見直しや参加者の広範な募集などを考慮し、パパ友づくりを促進する必要があると思われる。

次に、パパと子どもの関係づくりについては、「子どもとふれあう良い機会になる」という意見や、「平日は帰りが遅いので、この時間だけは子どもを独占できる」という意見があり、本企画が父親と子どものコミュニケーションの場として利用されていることが伺われる。さらに、数名の参加者からは、「自身(父親)と子どもがここに参加している間は、母親は子どもと離れて自分の時間(買い物や美容院等に行く)がもてる」という意見も出された。田中(2009)の研究においては、父親がサークルに参加し、母親の余暇時間が持てることが母親の育児負担の軽減になっており、母親の育児の持続性に影響しているのではないかと述べられている。これより、父親と子どもが企画に参加することは、父親と子どものコミュニケーションの促進だけでなく、母親の育児負担軽減になるなど、父親・母親の双方にとって良好な効果をもたらすと考えられる。

また、これまでの研究から、父親に対する子育て支援プログラムやサークルは、週末を子どもと父親で楽しむという「子育てのレジャー化」が多く見受けられ(田中, 2009)、イベント的で補助的な育児支援が典型的であり、今後は、父親に家事、育児の具体的な内容や手順を示していく取り組みを積極的に位置づけるべきであると示唆されている(大元, 2010)。本企画についても、現段階では、週末を子どもと父親で楽しむという「遊び」の要素が強かったが、歯磨き指導や料理作り、子どもとのコミュニケーションについての学習会などを通じて、世話や母親的役割を支援することも心がけた。参加した父親からも、「今までしていなかった子どもの歯磨きをするようになった」、「家でも作ってみようと思った」などの意見が出され、家庭においても実践が可能な育児支援へとつながったのではないかとと思われる。

次世代の親準備教育については、近い将来親になる可能性が高い大学生の企画参加を促した。特に男子大学生については、母親や父親のフリートークの間に、絵本の読み聞かせや遊び相手になるといった子どもの世話や、父親と共に料理作りを行うなどの役割を与えた。田中・橋本(2007)は、父親に対するインタビューから、育児に積極的でない父親は、家事を母親に任せていたという自身の父親の姿を手本としていることや、家事のスキルを修得してこなかったことが原因となり、父親も家事・育児を担う当事者であるという認識が弱く、いざ家事・育児に関わろうとしても、妻に聞かなくては分からないという事態を招いているのではないかと述べている。また、宮本・藤崎(2008)は、現在の父親が、自身は世話や社会化の担い手としての父親モデルが存在しない環境で育ってきた中で、今父親となりその役割をどのように担っていくべきなのか戸惑っているのは当然のことであると述べている。さらに、父親の育児ストレスの低減には、父親が出生前に子どもとの接触の機会をもち、育児の楽しさや子どもへの関心を高められるような支援が有効であることが示唆されている(清水・住岡・岸田・眞鍋, 2008)。これより、大学生がこのプログラムに参加し、父親と子どもが実際に関わっている場面に立ち会うことで、育児をしている父親のモデルを間近に感じることができ、自身も子どもとの関わりを経験することにより、将来像をイメージしやすくなるのではないかと考えられる。実際に企画に参加した男子学生からも、「今まで父親が子どもの世話をするイメージがなかったが、サタデーパパで父親が子どもの世話をしている場面を見て良いモデルになった」、「大学生は子どもと触れ合う機会は少なく、最初は緊張したが、今からこのような経験があれば徐々に慣れてくるのではないかと」という意見があり、大学生が父親の現状や意識を理解する機会にもなってい

た。また、本プログラムは大学生の参加を得て、現役の父親たちとの接触を通して父親モデルを習得してもらうことを意図したが、参加した子ども達にとっては、若い男性が父親的な役割を果たしていることを間近に観察する機会となり、新たな男性・父親イメージの形成に役立ったのではないかと考えられる。今後はさらに、次世代の父親である学生を育てていくプログラムなども独自に開発する必要があると思われる。

最後に、父親の子育て支援について、森田(2001)は、日本の子育て支援は、親たちの主体的な活動を育てるという視点が弱かったように感じるとした上で、単に「預かる」、「教える」という子育て支援では、子育てする力を親に身につけてもらい、楽しみながら子育てする親を育てることにたどり着くことは難しいと指摘している。本企画も、今後は、参加者の意見を取り入れ、父親が参加しやすい環境を整えるとともに、父親が主体となり、企画の立ち上げや主導権を握るといった活動を支援することが必要となってくるとと思われる。

引用文献

- 安藤哲也 (2010). パパ友つくろう! 地域における父親ネットワークの効力 児童心理, 64(3), 74-81.
- 青野篤子 (2009). 「男性の子育て」支援の現状と課題 福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 9-14.
- 朝日新聞 (asahi.com) <<http://www.asahi.com/job/news/TKY201007160595.html>>
- ファザーリングジャパンホームページ <http://www.fathering.jp/index.html>
- 伊志嶺美津子 (2005). 平成 16 年度厚生労働科学研究報告書 子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究
- 宮本知子・藤崎春代 (2008). 日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 11, 57-66.
- 森田明美 (2001). 少子化時代の子どもの育ち・子育て支援施策 都市問題研究, 53(6), 59-73.
- 中村 正(2008). 男性と家族——父親政策の視点から——宮本みち子・善積京子 (編) 現代世界の結婚と家族 日本放送出版協会 pp.181-193.
- 大元千種 (2010). 父親の育児参加とその支援について 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 5, 187-196.
- 佐々木綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.
- 清水尚子・住岡里永子・岸田真由紀・眞鍋えみ子 (2008). 育児期における父親の育児ストレス、ストレス対処, ストレス反応の関連 京府医大看護紀要, 17, 79-86.
- 田中結花子 (2009). 父親の子育て意識と子育て支援——父親の子育てサークル参加が家族に与える影響の実態調査からの考察—— 医学と生物学, 153(8), 292-301.
- 田中和江・橋本紀子 (2007). 父親の育児とそれに対する支援の現状と課題——父親の労働状況と育児参加の実態から見る一考察——女子栄養大学紀要, 38, 53-74.
- 吉岡亜希子(2009). 子育て講座における父親の学習過程と意識変容——さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に——北海道大学大学院教育学研究院紀要, 107, 179-193.

Practical research on men's child-raising programs

Nozomi Notsuyama, Seiko Sato, Chiaki Nakahama, and Atsuko Aono

In Japan, a variety of countermeasures to the decreasing birthrate were enforced with fewer children. However, most of them are only to help or support mothers who bring up children and they have limitations in halting the decreasing birthrate. To resolve the declining birthrate and accomplish work-life balance, men have to take part in child-raising as much as women or mothers have taken part in the workplace. Although there are some actions or programs to facilitate men's child-raising, they do not seem to have the intended results because of their one-off and play-centered program. In this paper, we presented our original program and argued the importance of child-raising programs aiming to allow men or fathers to become real care givers.